

(資料)

ニュージーランドで開催された National Rural Health Conference 2017 参加報告 - へき地医療従事者の継続教育・ネットワーク構築と 担い手育成の場としての学会 -

知念真樹¹⁾ 神里みどり¹⁾

キーワード: ニュージーランド、ルーラルヘルス、学会

Key words: New Zealand, rural health, conference

I. 学会概要

2017年3月31日～4月1日の2日間、ニュージーランドのウェリントンでNational Rural Health Conference 2017が開催された。この学会は、今回で26回目の開催となるニュージーランドの国内学会で、僻地医療に関わる医師、看護師、歯科医師、薬剤師、理学療法士等の医療従事者や、へき地医療に興味のある学生達が参加して行われている。今年は、ニュージーランド全土およびクック諸島から520人の参加があり、その中で外国人は私を含めて2名のみだった。

学会が開催されたウェリントンは、ニュージーランドの首都であり、北島南端部に位置する。中心街から5分程度歩けば、オリエンタル・ベイのウォーターフロントが散策でき、緑豊かな丘陵地帯を眼下にケーブルカーに乗れば、展望台から市街地を一望することができる。人口は約40万人である。(ニュージーランド観光局, 2017)

1. 先住民の文化を尊重するニュージーランド

ニュージーランドでは、先住民族であるマオリ族が尊重されている。マオリ語のみで番組を放映しているテレビ局が存在し、小学校でもマオリ語やマオリの文化を教えている。また、マオリ族がもともと住んでいる地域も、入植者は手を付けずこれまでのようにマオリ族が生活を続けている。

今回参加した学会も、マオリ族の文化様式で、オープニングセレモニーが開始された。まず、入場の際に、参加者を迎え入れる側であるウェリントンの人たちが会場に入り(女性が先に入るという順番がある)、その後ウェリントン以外から来た参加者が会場に入った。女性が先に会場に入るの、平和の象徴であり、男性が先の場合は戦いを意味するということを参加者の方から伺った。セレモニーでは、まずは迎える側の代表がマオリ語で歓迎の言葉をのべ、次いで英語で挨拶をし、マオリ語の歓迎

の歌を歌う。迎えられる側も、同様にマオリ語と英語で挨拶し、マオリ語のお礼の歌を歌った。そして、学会長の「Kia ora」というマオリの挨拶から学会が始まった。学会全体をとおして、マオリの文化様式が貫かれており、ニュージーランドの人々の生活にマオリ文化が自然に溶け込んでいることに感銘を受けた。

II. 学会の内容

1. 基調講演

学会では、基調講演が8つ(高齢化問題と医療保険、保健政策、農家のうつと自殺の問題(当事者)、家庭内暴力の問題(当事者)、へき地医療教育の学校の必要性、ニュージーランドの水汚染の問題、肥満の科学など)、セッションは全部で41題あり、診断・治療関連15題、キャリア関連5題、学生や職種の交流やネットワークづくり関連3題、看護ケア3題、研究・調査3題、へき地医療の教育・GPトレーニング関連3題、病院経営2題、テレヘルス2題、保健政策1題、環境と健康1題、臨床検査技師関連1題、歯科関連1題、リハビリテーション関連1題と内容は多岐にわたっていた。

初日の基調講演では、General Practitioner (GP)であり、Health care homeを併設したKaori Medical Centerの所長である、Peter Moodie氏が、今後人口が高齢化していくニュージーランドで、医療保険の基金が安定的に維持できるのかどうか、その中でヘルスケアホームの役割などについて、ご自身が経営されているケアホームの事例も含めながら説明されていた。日本と同様な国民皆保険のニュージーランドでも、現在の日本と同じようなことが問題になっているという印象であった。

2日目の基調講演では、ニュージーランドのへき地で問題になっている自殺について、17年前に妻を自殺でなくされた当事者のMatt Shirtcliffe氏が講演されていた。彼の妻は農場を経営していたが、ストレスから不眠症になりうつ病を発症した。仕事の忙しさと精神疾患(うつ)への偏見から本人も家族も医療機関にかかりに

1) 沖縄県立看護大学

くく、当時はそのことについて気軽に相談したり話したりできるような場所もなかった。妻が亡くなって後、彼自身そのトラウマから立ち直り、妻や自分のような人たちの力になるため、「Good Yarn workshops」を立ち上げた。現在はその団体で、精神疾患を理解してもらうためのワークショップを開催したり、ファシリテーターの育成等を行っている。ニュージーランドのへき地では農場を営んでいる方々が多く、同様な問題で悩んでいる住民も多いというお話だった。今回の学会で報告されている調査や政策のセッションにも精神疾患や自殺の話題が含まれており、へき地医療の課題であることがうかがえた。「health and independence report 2016」(Ministry of Health New Zealand, 2017)によると、ニュージーランド政府も2006年から主要な健康施策の一つとして自殺予防対策を推進している。しかし、自殺での死亡率はこの10年間ほぼ横ばいであり、2017年には対策が見直される予定である。

次いで、ドメスティックバイオレンス、児童虐待についての当事者であるNorm Hewitt氏の講演があった。Hewitt氏は、元ニュージーランドのマオリラグビーチームのキャプテンであり、ラグビーニュージーランド代表All Blacksの元メンバーでもある方で、その外見や栄光からは想像もつかないような虐待を父親から受けていたという話をされた。マオリ族の中では、かつて虐待を虐待としてとらえない風習があったこと、ご自身がそのトラウマをどう乗り越えてきたのかということ講演されていた。参加されていた方達に尋ねると、マオリ族はへき地に住んでいる者が多いとのことだったので、虐待やDVの予防についてもへき地での重要な健康課題と思われた。

2. セッションの紹介

参加したセッションの中からへき地での医療従事者のトレーニングプログラムとRural Nurseのネットワーク等に関連したものを紹介する。

1) The Cook Islands: developing capacity and a training program - linking to rural remote practice in NZ and beyond

クック諸島はニュージーランドではないが、クック諸島の健康局とニュージーランドの大学(オタゴ大学とRNZCGPのへき地医療分野)間で協定を結び、国を超えてへき地医療従事者の育成を行っている。内容としては、クック諸島のラロトンガ病院に研修のポストを設けて、ニュージーランドのへき地病院医療研修プログラムに登録されている医師(GP)をラロトンガ病院に派遣し、またラロトンガの病院からも交換でGPをニュージーランドのへき地の病院へ派遣し、お互いに研修を行うというプログラムである。セッションでは、実際にそのプログラムに関わっている医師が講演されていた。このプロ

ラムでは、一度に研修に行く医師も3~5名と比較的多く、受け入れる病院やクリニックも、研修を受け入れている間は医師の人数が増えるので助けになっているとのことだった。大学を介したこのような国際的な人事交流を兼ねた研修の方法もあるのだと思った。また、ニュージーランドとクック諸島はどちらも英語圏なので、言葉の壁がないことも連携しやすい要因の一つになっているのだろうと感じた。

2) Establishing a network for rural hospital nurses

このセッションでは、前日のNursing forum “How can rural nurses network, communicate and plan action in a collegial way?”の継続で話が進められていた。

へき地や離島で働いている看護師は、その環境だけでなく、教育の機会や専門職としての発展やスーパーバイズなどいろいろな問題を抱えているが、現在その状況を解決するための公的なRural Nurseの組織はニュージーランドにはない。前日のフォーラムでは、グループワークで、他のRural Nurseフォーラムなどで取り上げられてきた議題などをピックアップして討議したとのことだった。このセッションでは、前日の討議内容を踏まえ、どのようにRural Nurseのネットワークを構築していくか、という話を会場からの意見も聞きながらまとめていこうとしていた。最終的には、メールでの情報発信とネットワークづくりから始めることになった。

ニュージーランドは、全人口の14%(WHO, 2017)(日本は8.9%(総務省自治行政局過疎対策室, 2017)がへき地で暮らしており、Rural Nurseとして勤務する看護職も少なくない数がいると思われる。この学会は、それぞれが勤務するMedical CenterやClinicで起こっている問題や課題、その解決策などを共有しあえ、現場の状況を行政に訴えていけるようなネットワーク構築の場としても活用されていた。

III. 学会の意義

今回、ニュージーランドのRural Healthの学会に参加してみて、参加者の活動・研究内容の発表の場というよりは、へき地医療を支える医療従事者の継続教育や医療従事者間のネットワークづくり、Rural Healthの後継者育成を目的に行われている印象を受けた。特にへき地医療従事者間のネットワークづくりという点で、同業種はもちろん、Rural Healthを支えるすべての医療職や医療関連大学関係者が集まるこの学会は、業種を超えた学際的なネットワークづくりという重要な役割を担っていると感じた。

今回の学会参加で、本学の教育プログラムに参考になりそうなものは、クックアイランドとニュージーランドの病院の間で行っている研修プログラムであった。この

プログラムは、学部や大学院を終了した後、離島やへき地に就職した学生の卒後教育として応用できる可能性があるのではないかと感じた。学会での学びを今後のカリキュラム開発の参考にしたい。

もう一つ特記すべき事項として、2009年の文部科学省の助成事業で、本学に招待した、島嶼看護の専門家のDr. Jean Ross先生にお会いすることができ、さらなる交流を深めたことである。Jean先生の取り計らいで、雑誌掲載の取材(NEW ZEALAND RURAL GENERAL PRACTICE NETWORK, 2017)や島嶼看護の実践家を紹介頂き、その実践家を書いた新たな著書「Island NURSES」(Robertson A, 2017)を紹介頂いた。ぜひ、日本語でも紹介して頂きたいとの依頼であった。「島嶼看護」と題する著書は、世界で初めての出版であり、機会があればニュージーランドの島嶼における看護実践の活動を紹介したいと考えている。本学では、島嶼保健看護の学部・大学院教育を行っており、国外の島嶼看護に関する学会での情報交換や人的交流を行うことで、島嶼看護学のさらなる発展につながることを期待したい。

謝辞

本報告はJSPS科研費 JP16H05568(代表:神里みどり)の助成を受けたものです。謹んでお礼を申し上げます。

参考文献

- NEW ZEALAND RURAL GENERAL PRACTICE NETWORK. (2017). Kiwi-Japanese rural health connection alive and well. NETWORK NEWS, vol.32, 18.
- ニュージーランド政府観光局. ウェリントン. <https://www.newzealand.com/jp/facts/> (2020年3月25日現在)
- Ministry of Health, New Zealand. (2017). Health and Independence Report 2016. <http://www.health.govt.nz/publication/health-and-independence-report-2016> . (2020年3月25日現在)
- Robertson A, Howie L, Island NURSES. (2017). Allen & Unwin, Auckland.
- 総務省自治行政局過疎対策室(2017). 平成26年度版「過疎対策の現況」について(概要版). http://www.soumu.go.jp/main_content/000392823.pdf . (2020年3月25日現在)
- WHO (2017). New Zealand: WHO statistical profile. <http://www.who.int/gho/countries/nzl.pdf?ua=1>. (2020年3月25日現在)